

中ソ和解と日本の立場

東京外国語大学教授 中嶋嶺雄

1. 最近の日中関係、米中関係

最近の日中関係、米中関係を見てもみると、70年代初頭に形成された米中友好、日中友好というムードの中で培われて来た国際関係が、ここにきて変動して来ていると感じる方も多いかと思えます。私の近著のタイトルを『中ソ同盟の衝撃』（編者注：光文社カッパビジネス）といたしましたのも、中ソ同盟というのが、単なる軍事同盟一将来その方向も有り得るにせよ一ではなく、我が国の外交政策、安全保障政策、あるいは防衛政策の根幹にかかわる問題で、中国とソ連が再び共通の立場に立ち得ることを想定しているわけです。

そういう不安があればこそ、政府、自民党あるいは外務省も、二階堂幹事長を特使として、北京へ派遣することになったわけですが、それによって中国を説得する事は、かなり難しいと思えます。この二階堂訪中で、第二次円借款という高額の円借款の話も出るでしょうが、経済的援助で、従来の日中関係の回復をはかるのは難しいでしょう。

かつてあれ程政経不可分を唱えた中国が、当面は政経分離で、つまり貿易や経済関係は維持しても、政治的には従来と異なった立場に立つ事が有るような気がします。より基本的には、中国の世界戦略の、本質的な転換を見て行く必要があると思えます。それを十分理解しておかないと、今回のシュルツ米国務長官の訪中におけるように、期待と結果に大きなギャップが生ずることになります。

2月上旬のシュルツ訪中は、アメリカにとって

は、明らかに大きな誤算であったと思います。これは一昨年のヘイグ前国務長官の訪中以来、レーガン政権にとって大きな外交的機会でした。ヘイグ訪中以後、良くなると思っていた米中関係が、むしろ中国側のアメリカに対する敵しい態度で、昨年来非常に冷却化しています。

その原因は言うまでもなく、アメリカが台湾に、F5Gという最新の戦闘機まで供与しようとした事があったわけです。これについては、アメリカも中国の要望を入れて、F5というところで妥協し、昨年の8月には、将来は、アメリカは、台湾に武器を供与しないという共同声明を、外交レベルで出しました。

今度は新国務長官の訪問ですから、本来ならば中国も、アメリカの努力を多として、米中関係の改善に積極的になると思いきや、予想に反して実に冷たい態度であったといっているでしょう。今回のシュルツ訪中には、アメリカなりの重要な世界戦略が秘められており、米中関係を大きく修復する事によって、できれば趙紫陽首相の訪米、レーガン大統領の訪中を実現し、レーガン政権時代の1つの大きな外交的なパフォーマンスを終了して、次の第2期レーガン政権につなぎたいという希望があったと思います。しかし、肝心の趙紫陽首相の訪米について中国側は、シュルツ国務長官が帰国の途についた途端に、訪米は受諾したが、年内という約束は無かったと言い始めました。そして今回の訪問によっても、米中間の懸案は解決しなかった事を示唆しました。

更に台湾関係は廃棄すべきであるという、強い主張が重ねて出されて来たわけです。のみならず、米中間には台湾問題の他にも、この1月に決裂した、米中貿易摩擦の問題があり、これはちょうど、かつての沖縄返還当時の日米繊維摩擦と同じものです。中国は、アメリカの一方的な繊維輸入抑制に怒って、アメリカからの大豆や綿花の輸入をストップするという摩擦が生じていました。

この問題も決着がつかないまま、1911年の辛亥革命以前の清朝の時代の、湖広鉄道の債権を持っているアメリカ人が、1979年に裁判所に提訴し、裁判所はそれを認めるという事があり、それをめぐって中国側が非常に不満を表明するなど、何か米中関係が非常にぎくしゃくして来ました。それはあたかも、この3月から始まる中ソの次官級会談を目前に、米中関係の不協和を中国側があえて増幅しているかに見えます。

このように見てきますと、米中関係は、従来とは本質的に変わったと言ってよいと思います。米中接近以来の、アメリカ、中国、日本が一緒になって、ソ連の覇権主義を批判して反覇権外交を進めた、70年代の米日中の、いわゆる連携が、今や終りつつあるのではないかという不安を、日本政府も、ホワイトハウスも、ひしひしと感じているのであります。

シュルツは、現在、アメリカにおいて、レーガン大統領に勝るとさえ言われている、最も評価の高い人物で、そのシュルツが、わずかな日数で、精力的に何人かの中国首脳と個別会談を行ったにもかかわらず、中国の態度がまさに手のひらを返すようなものであったことは、ワシントンにとって大きな衝撃ではないかと思えます。

シュルツ訪中において、南北朝鮮のクロス承認

ということが言われましたが、北朝鮮がはっきり否定的な見解を持ち、後述のとおり昨年の金日成の訪中、鄧小平、胡耀邦訪朝の時にも、クロス承認は当面とらないと、はっきり言明しあっている事が確認されており、これらが表に出て来た事は、シュルツ訪中がうまくいかなかったという感じを受けましたが、やはりその通りでした。

また趙紫陽の訪米に関して、本当に行われるか、あるいは訪米が実現したとしても、形式的な首脳外交に終り、米中関係の修復にはならないのではないかという感想を持ちました。というのは、中国の政治的ランキングから言うと、趙紫陽首相は7～8番目の人で、デジジョン・メーカーではないからです。今や鄧小平のサポートのもとに、党の実権を握り、中国のエースとして全面的なリーダーシップを発揮しつつあるのは、対ソ改善論者である胡耀邦なのです。しかしその胡耀邦は、シュルツとは会いませんでした。

2. 教科書問題

趙紫陽首相は昨年6月の訪日でも、日中関係は永遠だと表明しましたが、その舌の根も乾かぬうちに、中国は、教科書問題をめぐって、日本の「軍国化」「右傾化」に対し非常に激しく批判しました。言ってみれば、趙紫陽の面目は丸つぶれですが、その辺が、中国の最近の変化を示す基調だと見なければいけないと思います。ですから、今後中国は、日本に対しさまざまな点できびしい態度に出てくるであろうと思われます。現に昨年の教科書問題でも出ておりましたが、中曽根政権になってから、かなりいろいろな批判ができています。

例えば、中曽根外交は第一着手として、韓国を

訪れ、日韓関係の修復、正常化を図ったのですが、これに対する中国の反応は非常に冷やか、かつ警戒的で、中曽根訪韓は南北朝鮮の分断固定化につながる日韓癒着であるという、一昔前に聞かれた言葉を再び言い始めています。中国はこの10年間は、むしろ日本の防衛力増強を鼓吹し、ソ連に対抗しようと言って来たのでした。それ故、日本の革新政党は、中国に裏切られた形になり、中国離れも起こりました。ここに来て、中国、ソ連、北朝鮮が同じような事を言い出しているのが問題です。

中曽根訪米についても、その直前の日本からアメリカへの先端技術供与問題についても、明らかに新華社、『人民日報』などは、激しくこれを批判しています。日本の防衛力増強の姿勢がはっきりすればする程、中国は日本に対して、警戒的かつ厳しい批判をするのではないかと、特に中曽根政権が持つ体質には、中国も警戒心が強まり、今後ますます、日中関係は厳しさを増すであろうと思われる。

そして、最近の一番いいエピソードを2つ紹介しますと、1つは中川一郎氏の死についてです。これを中国は軍国主義者の敗北であると論じています。もう1つは、党幹部用の新聞で、ロッキード裁判をめぐる田中角栄元首相の罪を紹介し始めているという事です。これらの事実から私は、中国の姿勢が変わって来ているのを感じます。この間日本の政府、外務省の認識は、かなり甘かったのではないかと思います。よもや中ソの和解は無いと見ており、たとえ和解したにしても、大した事は無いと見ているからです。

3. 鄧小平・胡耀邦

先程の趙紫陽首相の話ですが、中国側は人を見

て外交を行っているのです。例えば、昨年9月は、中国にとっても重要な時期で、中国共産党12回大会が開かれ、胡耀邦が党総書記になり、党の規約も改正されました。また金日成が中国を訪れ、4月に鄧小平、胡耀邦という最高の意志決定者が密かに平壤を訪れていた事も明らかになり、世界を驚かせたものです。今日の中国にとって、北朝鮮首相は何と云っても賓客で、中国としても手厚くもてなす必要があり、中ソ和解が進む中でその事についても話しあう必要がある現在、鄧小平、胡耀邦という最高の意志決定者が付き添って、アテンドしていました。

その後、サッチャー首相が中国を訪れ、香港の将来をめぐる話し合いましたが、これも歴史の岐路に立つ非常に重要な問題であるだけに、鄧小平、胡耀邦等が、身構えながらも手厚くもてなしました。

フランス共産党マルシェ書記長の訪中の際も、鄧小平、胡耀邦が会見し、極めてソ連に近いフランス共産党に対して「かつて自分の意見を入れないと、相手を修正主義であると罵った態度は毛沢東一派の誤りであった」と言って、関係の強化をはかっています。これは、中ソ和解は単に中ソ間のバイラテラルな関係だけではなく、いわば、国際共産主義運動の再編をも含む変化になりつつあるという事です。これらの時に鄧小平、胡耀邦が出て、シュルツに胡耀邦が会わなかった事には、かなり大きな意味があると思います。

また昨年は、サッチャー訪中と前後して、日本の鈴木首相も、日中国交十周年の御祝儀外交で訪中していますが、鄧小平、胡耀邦はちょっと会っただけで、もっぱら趙紫陽首相が出ておりました。このように見てくると、中国の変化、中国の

戦略・戦術が手に取るように明らかになって来るのです。

4. 中国の変化の理由

では、なぜ中国がこのような変化をしたのかという問題について触れてみます。この点を理解しない限り、中ソ接近なり、中ソ和解の本質的な意味は、わからないと思います。

ここ2～3年来、私が中ソ和解という事を言っているのは、中国内政の変化を見てると、中ソ和解への方向が見えて来るからです。多くの人は中ソは和解は起こらないであろうと考えているようですが、それは期待であって、中ソの対立も和解も、すべて内在的な要因によるもので、外部はどうしようもない、という事を理解しておくべきです。

例えば、中ソ和解にしても、日本人の目から見れば、中国にとって余り得ではないと思ひ、また、4つの現代化についても、冠婚葬祭も行われなくなった現在の農村で、心の安らぎを失った農民達に、生産性の向上は期待できないではないか、1人当りのGNPが日本の1/40という低さの中国に、日本の最も高度に発達した工業技術を取り入れてもうまくいく筈がない、なぜもっと中国にマッチしたやり方をしないのか、と思われるのですが、鄧小平がそう思わなければ、運ばないし、鄧小平がそう思っても、共産党が動かなくては、事は実現されないのです。

ところが、そこは、やはり共産党の論理が働いて、出てくるのが、イデオロギーの問題であると思ひます。社会主義経済がうまく行かないのを見て、とかく日本は、革命国家におけるイデオロギーの役割を過小評価しているむきがありますが、

そこに実は問題があります。

さて、今の中国は、鄧小平、胡耀邦という、文化大革命の時、毛沢東が打倒しようとした、紛れもない旧実権派、毛沢東的価値観からすれば最も悪い一味が天下を取っています。結局、毛沢東主義が敗北し、否定されて、旧実権派が力を握ったのですが、この意味は非常に大きいのです。中国共産党は、鄧小平のイニシアチブの下に、鄧小平が最も信頼している胡耀邦を中国共産党の最高権力者である総書記にしました。従来は党主席とっていたものですが、昨年9月に主席制をやめて以来、総書記と言われるようになり、書記局中心の政治になったのです。それだけ党の中央が、より官僚統制的に機能強化され、書記局中心のソ連共産党に似て来たわけですから。

かつて毛沢東時代には、苦難の長征に加わったか否かが、エリートへのパスポートでしたが、最近の中国では、共産主義青年団の幹部であった人達が著しく台頭しています。共産主義青年団というのは、毛沢東の時代には打倒され、組織も解散させられたに等しく、その頃、胡耀邦も行方不明でした。現外務大臣呉学謙も共産主義青年団の国際部長、つまり共青の国際派と言われた人であり、書記局の中には、もう1人胡啓立という人もいます。こういう官僚的支配の時代に入って来たのです。毛沢東の時代は、動乱の時代、西郷隆盛の時代だったのが、いよいよ大久保利通の時代に入って、組織の時代になって来たのです。

毛沢東の時代には、カリスマ的な支配者が大きな意味を持ちました。これからの中国の指導者は、ある意味では小物になりますが、それだけに手堅くして来たかな党官僚、まさにノーメン・クラトゥーラと言われる赤い貴族達が、党をリード

し中国をリードして行くのではないかと思います。鄧小平、胡耀邦、胡啓立という人達は、知ソ派の、よりオーソドックスなタイプの党官僚ですが、こういう人達がでて来た事を考えると、今の中国のリーダーシップは、大きく注目されるところであります。この体制を、私は党官僚独裁体制と呼んでいます。

5. 党官僚独裁体制

こういう党官僚独裁体制のもとで、非毛沢東化を進めているわけですが、これは、一昨年に文書の上で毛沢東を否定し、昨年は党規約を改正することにより、党中央では漸く達成されました。同時に、この毛沢東否定の際に、初めてソ連を文書で肯定的に評価しているのです。

現在、この党官僚独裁体制を覆すのは、かなり難しいと思います。人民解放軍の地方の軍人が、鄧小平に批判を持っているという見方があり、それも否定はできませんが、これからは、動乱の時代ではなく平時に戻って行くので、より官僚的な統制を効かせるリーダー達の時代になって行くのではないのでしょうか。こうした状況の下で毛沢東政治というものは、今や完全に否定され、毛沢東の衣鉢を継いだ華国峰などは、消息さえわからなくなっています。

では、この劉・鄧ラインと毛沢東との中間にあって、一番日本に密接なつながりを持っていた周恩来の系列の人達は、どうなったのでしょうか。今や飾りものにすぎなくなった政治局に、葉劍英や李先念らがありますが、彼らには最早影響力がありません。そういう状況で、鄧小平はあえて彼らを温存したとも言えます。これは、実に鄧小平の人事の妙だと思えます。こうした中で、現在、

周恩来の立場が問われ始めてきています。すなわち、周恩来は中国の宰相として、長い間要の地位にあった人ですが、今日全く否定されている毛沢東政治の合間に、一体何をしていたかを問われているのです。

私は1966年11月12日に北京の人民大会堂で行われた孫文生誕百周年記念式典に出席しましたが、文化大革命の熱気に包まれた会場で、周恩来は毛沢東万歳を絶叫して、劉・鄧ラインと袂を分ったのでした。この時、私は積年の周恩来に対するイメージが崩れて、もしかすると軽い人物ではないだろうかという気がしたのですが、この時に顔面蒼白となった劉少奇と、周恩来を睨みつけていた鄧小平の顔を忘れる事ができません。後年周恩来は毛沢東の非を認め、毛沢東をいただきつつも、その体制下で改革をはかりましたが、あの時の態度を鄧小平は、忘れられないのではないのでしょうか。

ここにもう1人彭徳懐という人物がおります。彼は、朝鮮戦争の司令官で、人民公社の、大躍進政策をめぐって毛沢東をいさめ、真正面から挑戦した人物です。軍近代化論議でも毛沢東と対立して失脚し、遂には紅衛兵に撲殺されたに等しいという不幸な死に方をしたのですが、最近、毛沢東選集を出していた人民出版社から、彭徳懐自伝という本が出版されました。劉・鄧実権派の時代になって、彼の評価が高まるのは当然と言えましょう。そしてまた、彼の不幸な死に方に対する同情もあり、武骨で気さくな野人肌の人柄に対する人望もあつく、今日の中国では、彭徳懐こそ人気ナンバーワンの政治家であると言えます。つまり、毛沢東によって、フルンチョフ主義者、現代修正主義の中国における代理人と批判された彭徳懐が、今や彭徳懐こそ正しかったと言われているのです。

そして彼は、今日のテーマの中ソ和解という事からすると、最もソ連に近い位置にあるわけです。

ここまでは、毛沢東政治に対する動と反動のダイナミックスの中で捕える事ができるのですが、驚くべき事に、今日の中国ではもう1つの潮流が復活しています。それは、高崗一派の人達です。

高崗は、1954年に、東北すなわち旧満州を独立王国にしようとしたカドで逮捕摘発され、翌55年に高崗は獄中で自殺したと発表されました。これには林彪事件の時と同様の重要な中間項がぬけると思いますが、毛沢東は、高崗事件を称して、中国共産党にとって震度8の大地震であったと述懐しています。それは高崗が、当時中国で最も工業化の進んだ東北を基盤にして、党中央に反逆しようとしていたからであると言っています。

高崗は、早い時期に失脚したためよく知られておりませんが、中華人民共和国成立の1949年には、毛沢東、劉少奇、周恩来、高崗という順で、中央人民政府副主席として、天安門の楼に登った人で、革命の功績も非常に高く、毛沢東も評価していたのですが、要職に着けなかった人事の不満から、東北に基盤を築き、東北の最高実力者になったのです。

当然それに目をつけたのがスターリンで、ソ連の衛星国化をはかったのです。そして、高崗事件当時、東北の指導者達は、根こそぎ逮捕摘発されたのですが、去年の9月の12回大会の名簿を見ると、事件の首謀者が次々に出ています。調べてみると、何と今の中国の東北は、高崗の部下達によって再び握られているのです。これには、日本の新聞も政府、外務省も全く気がついておりませんでした。例えば、北京に最も近い、東北で一番重要な遼寧省の第1書記に郭峰、ソ連との関係か

ら一番重要な黒龍江省の最高指導者に趙徳尊という、かつての親ソ派、スターリン主義者が出て来たのです。つまりこの間までの毛沢東、周恩来時代には、考えられなかったような事が起こりつつあります。それは、まさに中国が、内在的にこういう政治潮流になって来ているからなのです。

6. ロシア語世代の台頭

この事に従ったもう1つの変化は、東北を中心とするロシア語世代の台頭です。1950年代にロシア語で育った人達が、ロシア語が敵性言語と見なされた毛沢東の時代が過ぎた今、一斉に台頭して来ています。そしてそれに呼応するかのようには、銭其琛、于洪亮らの知ソ派が出てきています。中国は、モスクワの方を向き始めているのです。

去年の教科書問題にしても、日本の「侵略」を「進出」にした事が問題であったのではなくて、それは、かつてあれ程アメリカを敵視して来た中国が、米中接近をする際に、日本を軍国主義として批判したのと同様に、中ソ和解の過程で、自らの政策転換を正当化するために、日本をたたく必要があり、その口実にしたにすぎないのです。中国にとってのより本質的な問題は、中国の世界戦略の転換にあったと私は見るわけです。このように見ると、その後の中国の事態が全部明らかになって来ると思えます。

片やソ連の方には、ソ連外務省の極東第1部長である、カーピッツァがおり、彼は、今回次官に昇進しましたが、したたかな人物です。ソ連の外交があちこちでうまくいっていないにもかかわらず、その世界戦略がここまで伸びているのは、continuityによると思えます。毎年のように変わる日本の外務大臣に対し、グロムイコは25年も外

務大臣の職にあります。そしてカービッツは、グロムイコの下で、10数年専ら中国問題に専念し、しばしば中国も訪れ、密かに要人とも接触しているのです。その時彼は中国語を使います。構えがちがうわけですから。こういうソ連にとって、中ソ対立というのは、米ソ対立という大問題に比べたら、副次的なものにすぎず、言うなれば内輪喧嘩であり、早く解決したいのです。

中ソ対立が内輪めであるというメルクマールは、2つあります。1つは、米中軍事協力の問題で、中国の戦闘機はソ連製であって、アメリカの戦闘機は結局受け入れなかったという事です。これは、社会主義国家の存立にかかわる1つの踏絵で、これが米中関係のこじれの一番の原因であったと思います。もう1つはポーランド問題で、ポーランドの「連帯」の、もう社会主義はご免だという動きに対して、中国は絶対にこうなはいけないという通達を出すとともに、「連帯」つぶしのヤルゼルスキー政権と、通商貿易協定を結んで、今日に至っているのです。

社会主義が成熟すればする程、そこから離脱しようとする動きが出てくる中で、赤い貴族の中ソは、それを抑圧するためにも、対立してられないという共通基盤を認識し始めていると思いま

す。このように考えると、1つのトレンドとして、より深い傾向として、まさに中国内政変化の延長線上に、中ソ和解があると私には思われます。シベリア開発に中国人を投入することも、将来ありえない事ではありません。

8. 日本の立場

今までの日本では、中ソ対立、日中友好は永遠であるかのごとき考えが前提になっていたものですから、最近の中ソ接近に裏切られたと思う向きもあるでしょう。残念ながら、アメリカの見方も従来楽観的であったため、そのリアクションとして、レーガン大統領が強い態度に出て、台湾にてこ入れし、日本の防衛力増強を要請するという可能性もあります。考えてみれば、ソ連と中国とは、同じ共産主義政権で、同じ国家目標を持っているのですから、そこを見誤ってはいけません。そして、日中平和友好条約の誤りは、両国の根本的な体制の相違を認識せずに、わが国の生存の根幹にかかわる問題にまで、相互協力を求めた点にあります。日本人は、余りにも旧中国の文物、大古の歴史に目を奪われて、幻想を抱き勝ちです。もっと冷静に今の中国政治の現実を見て行く必要があるのではないのでしょうか。

